

<翻 訳>

## 叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXIII) <sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラーヤナ，ナーラダ，世界創造説，ウパリチャラ

[321 章] (B.334 章, C.12650-12695, K.342 章) (ナーラーヤナ章 (1) ナーラダの願望，世界創造説)

ユディシュティラは言った。

- (1) 家住者であれ，梵行者であれ，あるいは林棲者であれ，乞食者であれ，完成に至ることを<sup>2</sup>願うならば，その者はいかなる神を敬うべきですか。
- (2) その者はどうすれば永遠の天界を得られますか。どうすれば最高の幸福が得られますか<sup>3</sup>。(その者は)いかなる規定によって神を，そして祖霊を祭るべきですか。
- (3) 解脱した者はどんな所 (gati) に行くのですか。解脱は何を本質とするのですか。天界に達した者は，天界から落ちないために何を為すべきですか。
- (4) 神々の神は誰ですか。祖霊たちの祖霊は誰ですか。それよりも高きものについてお話下さい，祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (5) 質問を知る<sup>4</sup>汝は，ここで私に秘密の質問を尋ねる，無垢な者よ。これは論理によっては<sup>5</sup>百年かかっても語ることはできない。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXXII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 10 号)に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1899]: E.W.Hopkins, "Lexicographical Notes from the Mahābhārata", JAOS vol.20, 1899, pp.18-30.
- Hopkins[1902]: E.W.Hopkins, "Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata", JAOS vol.23, 1902, pp.109-155.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, "Epic Chronology", JAOS. vol.24, 1903, pp.7-56.
- Hopkins[1910]: E.W.Hopkins, "Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic," JAOS 30, 1910, pp.347-374.
- Gonda [1969]: J.Gonda, Aspects of early Viṣṇuism, Utrecht 1954, 2nd edition, Delhi-Varanasi-Patna, 1969.
- Esnouf[1979]: A.Esnouf, Nārāyaṇīya Parvan du Mahābhārata, Paris, 1979.
- Hara[1980]: Minoru Hara, "Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit Guru and Ācārya", Sanskrit and Indian Studies (Essays in Honour of Daniel H.H.Ingalls), 1980, pp.93-118.
- Matsubara[1994]: Mitsunori Matsubara, Pāncarātra Saṃhitās and Early Vaiṣṇava Theology, Delhi, 1994.

<sup>2</sup>siddhim āsthātum Cs. siddhim, mokṣam / (siddhim とは，解脱に，という意味である)

<sup>3</sup>P. kuto niḥśreyasaṃ param B.,K.: kuto niḥśreyasaṃ param Ca. niśreyasopadeśaparam śāstram kuto jātam, kena praṇītam / (niśreyasopadeśaparam 幸福の教えを専らとする，聖典は，kuto 何故生じたのか，すなわち，何故書かれたのか，という意味である)

<sup>4</sup>praśnavit Cf.MBh.XII.276.34; Manu 2.110

<sup>5</sup>tarkayā N. tarkayā tarkaṇa ārṣo līṅgavyatyayah / (tarkayā は，tarkaṇa が正しい語形である。古語は，名詞の性が変更するのである) Cf.Hopkins[Great Epic]: both scripture and argument, tarka, are useless in comparison with the enlightening grace of God, which alone can illuminate the "mysterious hidden communication of truth", p.91.17.

- (6) 神の恩寵なしには、あるいは、知識の伝承なしには<sup>6</sup>(語ることはできない)。この理解するのが難しい物語 (ākhyāna) を、汝に語るであろう、敵を殺す者よ。
- (7) ここでも人はこの古譚を語る。聖仙ナーラダとナーラーヤナとの対話を。
- (8) 一切を本性とし、四つの姿をもち<sup>7</sup>、永遠なるナーラーヤナは、ダルマの息子として<sup>8</sup>生まれたのである。このように父は私に語った。(Cf.MBh.XII.326.13)
- (9) かつてクリタ・ユガ期における(マヌ)スヴァーヤムブヴァの時代には、偉大な王よ、ナラ、ナーラーヤナ、ハリ、そしてクリシュナ<sup>9</sup>(として存在した)。
- (10) 彼らのうち、不動のナーラーヤナとナラは、黄金でできた馬車で<sup>10</sup>(ヒマラヤ山中の)パダリーの隠棲所に行って<sup>11</sup>、苦行を行った。
- (11) その乗物は、八つの車輪をもち<sup>12</sup>、妖怪たちによって用いられた (bhūtayuktam), 美しいものである。そこで、最初の世界の保護者である両者は、痩せて、血管が見えるほど憔悴した。
- (12) 熱力と光輝のために、神々でさえも(二柱の神を)見るのが困難であった。この二柱の神が恩寵を与える者が、二柱の神を見ることができたのである。
- (13) 今やナーラダは、その心が二神に認められたので、心中の願望に突き動かされ<sup>13</sup>、大メール山の頂上からガンダマーダナ山の、
- (14) そのたいへん広いところに、降りて、あらゆる世界を歩いた。そして彼は、矢のように早く、その場所、すなわちパダリーの隠棲所に、行ったのである、王よ。
- (15) 二神が日課を行っている時に、ナーラダに好奇心が生じた。『これが、もろもろの世界がよって立つ完全な場所である<sup>14</sup>。

<sup>6</sup>rte deva prasādād vā rājan jñānāgamena vā Cf.Matsubara[1994]: the transcendent God, not an object of logical or philosophical investigation, p.71.28, true knowledge, reached through the grace of God, *devaprasāda*, p.77.16; Cf.Oberlies[Grammar]: the instrumental used with *rte*, *rte* .....*jñānāgamena vā*, p.328.2.

<sup>7</sup>caturmūrtiḥ Cn. catasro mūrtayaḥ, narādyāḥ / ((caturmūrtiḥとは) ナラなどの四種の姿である) Cf.Hopkins[Great Epic]: the usual caturmūrti, p.184, fn.1; Matsubara[1994]: *caturmūrti*, underlying notion of Vyūha, p.120.5.

<sup>8</sup>dharmātmajaḥ Cf.Matsubara[1994]: *dharmātmaja*, p.147, No.38)

<sup>9</sup>P,K.: hariḥ kṛṣṇas tathaiva ca B. hariḥ kṛṣṇaḥ svayaṃbhavaḥ Cn. svayaṃbhava ity etena vāsudevasyaite catvāro vyūhāḥ ajanmānaḥ / tena tu pāñcarātrāṇām iva vāsudevāt paramakāraṇāt saṃkarṣaṇākhyo jīva utpadyate, tataḥ pradyumnākhyam manaḥ jāyate, tato 'aniruddhākhyo 'haṃkāra utpadyate iti matam nirastam / (svayaṃbhavaḥ(自存者) というこの語によって、これらヴァースデーヴァの四種の形態は誕生をもたないものである。これによってパンチャラートラ派の者たちのごとく、最高因であるヴァースデーヴァから、サンカルシャナという名の個我が生じ、サンカルからブラドユムナという名の心が生じ、ブラドユムナからア Niludda という名の自我意識が生じた、という考えが否定されている)

<sup>10</sup>śakate kanakāmāye Cs. kanakamāye śakate rathe sthitau tapas tepatuḥ, nivṛttidharma cakratur ity arthaḥ / (kanakamāye śakate, すなわち、馬車に、座って、tapas tepatuḥ, すなわち、行為停止のダルマを行った、という意味である)

<sup>11</sup>badaryāsramam āsadya Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, regarded as an incarnation of Viṣṇu in the hermitage of Badarī, p.129.5.

<sup>12</sup>aṣṭacakram hi tad yānam Cs. avyaktamahadahaṃkāramahābhūtarūpair aṣṭabhiḥ cakrair yuktam / (未顕現・大・自我意識・(五) 元素の姿をした八種の車輪と結びついた、という意味である) Cf.Hopkins[1902]: As in this situation *aṣṭacakram* (Vedic) would be metrical, the choice (of *aṣṭacakram*) must be due to preference for the later form, p.115.5.

<sup>13</sup>hr̥cchayacoditaḥ Ca. hr̥cchayo 'trāntarātmā / (hr̥cchayaḥとは、ここでは、内的アートマンは、という意味である) Cn. antaryāmī / (hr̥cchayaḥとは) 内制者は、という意味である)

<sup>14</sup>idam tad āspadam kṛtsnam Cn. āspadam, adhiṣṭhānam / (āspadam とは、場所である、という意味である)

## 叙事詩の宗教哲学

- (16) 神・アスラ・ガンダルヴァを伴い、聖仙・キンナラ・蛇を伴うもろもろの世界が(よって立つ完全な場所である)。この神は最初是一个の姿であったが、後に四種の姿をもって生まれたのである。
- (17) ダルマの偉大な家系は、これら(四種の姿)によって繁栄した。おお今日でも、ダルマはこれらの神々によって支持されている<sup>15</sup>。ナラとナーラーヤナ、クリシュナとハリによって。
- (18) このうちクリシュナとハリは他の行為に従事している。この(ナラとナーラーヤナの)二神は、すぐれたダルマをもって存在し<sup>16</sup>、そして苦行に専念している。
- (19) この二神は最高の住居(paramaṃ dhāman)である。二神が日課とする行為はどんなものであろうか。この栄光ある二柱の父は、あらゆる生き物にとっての神である。思慮深い二神は、一体どんな神を祭るのか。あるいは、いかなる祖先を(祭るのか)。」
- (20) と(ナーラダは)心で考えると、その時、ナーラーヤナへの信愛によって、すぐに二神の目の前に姿を現わした。
- (21) 神と祖先に関する祭式が終った時、二神は(ナーラダを)見て、聖典に説かれた通りの規定によって挨拶した。
- (22) 聖なる聖仙ナーラダは、この大変すばらしい、かつてなき、詳細な規定(にそった挨拶)を<sup>17</sup>見て、大いに喜び、近くに座った。
- (23) (ナーラダは)澄んだ心で(prasannenāntarātmanā)ナーラーヤナを見て、偉大な神に(mahādevam)敬礼し、次の言葉を語った。
- (24) 「御身は、もろもろのプラーナやアンガ(支分)とウパアンガ(補助支分)を含めたもろもろのヴェーダにおいて<sup>18</sup>、不生の者、永遠の者、尊敬すべき世界創造者(dhātṛ)、最高の不死の者として、称賛されています。御身の中に、過去と未来、この世界の一切は確立されています。
- (25) 神よ、家住期を根本とする四種のすべての生活期(にいる人々)は、日々、さまざまな姿で立つ御身を祭っています。
- (26) 御身は全世界の父であり、母であり、永遠の師です。ところで今日御身は、いかなる神を、いかなる祖先を祭っているのですか、私達は知りません<sup>19</sup>。」

至尊者は言った。

<sup>15</sup>P. anugrahīto B.,K.: anugrhitō

<sup>16</sup>P.,B.: sthitau dharmottarau hy etau K. sthitau dharmasutāv etau Cs. dharmasvabhāvena sthitau, pravṛttidharmakarāv eva sthitau / (dharmasvabhāvena sthitau とは、行為のダルマを行う者として、sthitau 存在し、という意味である)

<sup>17</sup>apūrvam vidhivistaram Cs. apūrvavidhivistaram, pravṛttibahuleṣu lokeṣu adṛṣṭapūrvam vidhivistaram / (apūrvavidhivistaram とは、多くの行為に満ちたもろもろの世界において、かつて見たことのない詳細な規定を、という意味である)

<sup>18</sup>vedeṣu sapurāṇeṣu sānopāṅgeṣu Cf.Hopkins[Great Epic]: Vedas, Purāṇas, Aṅgas, and Upāṅgas are sometimes grouped together, p.14.2.; Cf.MBh.328.6.

<sup>19</sup>P.,K.: pitaraṃ kaṃ na vidmahe B. pitaraṃ karma vidmahe

K. はこの後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.800\*)

kam arcasi mahābhāga tan me brūhiha pṛcchataḥ /

(大幸運をもつ方よ、御身は何を講えるのですか。それを今尋ねている私にお話し下さい。)

- (27) 話すべきことは、アートマンに関する永遠の秘密であり、口にすべきことではない。しかし、信愛ある汝に対しては、バラモンよ、ありのままに語るであろう。
- (28) 微細にして、認識できず、顕現せず、不動で、堅固であり<sup>20</sup>、もろもろの感官からも、もろもろの感官の対象からも、あらゆる生き物からも離れているもの、
- (29) それは、生き物たちの内的アートマンであり、知田者と語られる。三種のグナを離れたそれはブルシャとも考えられている<sup>21</sup>。それから、三種のグナからなる未顕現が生じるのである、最高のバラモンよ。
- (30) 顕現したものに存在する未顕現は、不変のプラクリティ (prakṛti 根本原質) である<sup>22</sup>。有と無を本性とする<sup>23</sup> それ (プラクリティ) が、我々二神の<sup>24</sup>源 (yoni) であると知れ。我々二神はこれを礼拝するのである。なぜならば、(これこそが) 神と、そして祖先と考えられるからである。
- (31) 祖先であれ、神であれ、再生族であれ、これよりも高位の存在は他にはない。これが我々二神のアートマンであると認識されるべきである。それ故我々二神は彼を敬うのである。
- (32) 彼によって<sup>25</sup>、世界の福祉を増進する道徳 (maryādā) は広げられたのである、バラモンよ。神に関する、そして祖先に関する (祭式を) 行え、というのが彼の教えである。
- (33) (1) ブラフマー、(2) スターヌ、(3) マヌ、(4) ダクシャ、(5) プリゲ、(6) ダルマ、(7) タパス、(8) ダマ<sup>26</sup>、(9) マリーチ、(10) アンギラス、(11) アトリ<sup>27</sup>、(12) プラストウヤ、(13) プラハ、(14) クラトゥ、(cf.MBh.XII.322.27, 327.29, 327.61; Manu 1.35)
- (34) (15) ヴァシシュタ、(16) パラメーシュティン、(17) ヴィヴァスヴァット、(18) ソーマ、(19) カルダマ、そして、(20) クローダ、(21) ヴィクリータ<sup>28</sup>と呼ばれる、

<sup>20</sup>yat tat sūkṣmam avijñeyam avyaktam acalaṃ dhruvam Cp. avyaktam, māyāpaṭenāvṛtam / (avyaktam とは、幻の布で覆われている、という意味である) Cs. vikārahitam / ((avyaktam とは) 変異のない、という意味である) Cn. acalaṃ, kūṭastham / (acalam とは、全く動かない、という意味である) Cp. vikṣeparahitam / ((acalam とは) 動揺しない、という意味である)

<sup>21</sup>triguṇavyatirikto 'sau puruṣa iti kalpitaḥ Cn. puri śarīre vasaṭīti yogāt puruṣa iti kalpitaḥ / na tu tasya dehasaṅgitvaṃ vāstavam / (puri 都城に、すなわち、身体に、住む、という語源的意味から、puruṣa iti kalpitaḥ プルシャと考えられている。しかし、それが身体と結合しているというのは真実ではない) Cf.Hopkins[Great Epic]: *triguṇas*, not only *rajas* and *tamas*, but also *sattva*, should be lost to attain God, p.121, fn.2.

<sup>22</sup>yā sā prakṛtir avyayā Ca. yā sā prakṛtir avyayā, vāśudevākhyā, sarvagatā, īśvarāparaparyāyā / (prakṛtir avyayā とは、ヴァースデーヴァと言われ、偏在し、イーシュヴァラの後の名称であるものは、という意味である) Cn. yā sattā, svayam avyaktā, vyakteṣu bhāveṣu ghaṭaḥ san, paṭaḥ san, iti sadrūpeṇa tiṣṭhati, saiva sattā avyayā / (yā, 自ずから未顕現である最高存在は、もろもろの顕現したものにおいて、瓶がある、布がある、というように「ある」という性質によって存在する、sā それか、avyayā, 不変の、最高存在である) Cf.Hopkins[Great Epic]: (in connection with the highest principle) Source is both born and indestructible, p.134, fn.1)

<sup>23</sup>sadasadātmakaḥ Cp. sadasadātmakaḥ, kāryakāraṇātmā / (sadasadātmakaḥ とは、原因と結果を本性とする、という意味である)

<sup>24</sup>āvayor Cn. āvayoḥ, jīveśvarayoḥ / (āvayoḥ とは、命我とイーシュヴァラの、という意味である) Cs. āvām aniruddhāṃśāv ity arthaḥ / (āvām とは、ア Niluḍḍa の二つの部分は、という意味である)

<sup>25</sup>tena Cn. tenaiva, māyopādhinā / (tena とは、幻影の欺きによって、という意味である)

<sup>26</sup>P. tapo damaḥ B.,K.: tathā yamaḥ B.,K. は、この読みのため、ブラジャーパティの名称として 21 挙げらるべきところ、一つ少なくなっている。これを補うため、次の詩節の最後に挙げられている *vikṛita* を、Ganguli は Avak, and Kṛita, Deussen は, *arvāk* と *kṛita* と解している。Hopkins[1902] は、20 の名前しか挙げられていないことを指摘している。(p.121.36)

<sup>27</sup>marīcir aṅgirātrīś ca Sandhi irregular: *aṅgirātrīś* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8. Double *sandhi*, 1.8.7. -ā- < /-ās a-/, < aṅgirātrīś ca, p.43.13.

<sup>28</sup>vikṛita eva ca Ganguli: Avak, and Kṛita, p.116.44. Deussen: Arvāk und Kṛita, p.751, v.36. Deussen は、Vācaspatyam と Śabdakalpद्रuma における prajāpati の呼称の参照を指示している。(p.751, 脚注) 両者とも 21 人のブラジャーパティの名称として、*'rvāk kṛita eva ca* という読みを収録している。 Cf.Hopkins[1899]: *vikṛita* 2)b, or *vikṛita* 2), nom. prop., xii.335.36 = 12686 has *vikṛita*, p.22.3.

叙事詩の宗教哲学

- (35) これら二十一人のプラジャーパティが(最初に)生まれたと伝えられている<sup>29</sup>。彼らは、この神の永遠の道徳 (maryādā) を敬っている。
- (36) これらのすぐれた再生族たちは、彼の(定めた) 神に関する祭式と祖先に関する祭式をつねに正しく認識した後、それから<sup>30</sup>、自分たちが獲得したもろもろのものを知ったのである<sup>31</sup>。
- (37) 天界に住む人々(dehinaḥ)も、その神を礼拝する<sup>32</sup>。彼らは、神の恩寵によって、神によって指示された果報のあるところ (gati) に行くのである。
- (38) 十七のグナともろもろの行為のなくなった者たちは<sup>33</sup>、(身体の) 十五の部分捨てた後<sup>34</sup>、解脱する、と定まっている。
- (39) 解脱した者たちの境地は、パラモンよ、知田者と考えられる<sup>35</sup>。なぜならば知田者は、偏在し<sup>36</sup>、グナなき者 (nirguṇaḥ) と言われるからである。
- (40) 知識のヨーガによって、(知田者は) 直観される。そして我々二神はそれから生じたのである<sup>37</sup>。このように知って、この永遠のアートマンを我々二神は礼拝するのである。
- (41) もろもろのヴェーダや、多くの身体が抛り所とした<sup>38</sup>生活期は、信愛によって彼を敬うのである。彼は、彼らに第一の境地を<sup>39</sup>与えるのである。
- (42) しかし、この世で、神によって清められ、絶対的な専心を実行する者たちは<sup>40</sup>、彼らにとってはるかに優れたことであるが、神自身に (tam) 入るのである。

<sup>29</sup>ekaviṃśatir utpannāś te prajāpatayaḥ Cf.Hopkins[1902]: “twenty-one Prajāpatis” are late-epic, p.121.35.

<sup>30</sup>tataḥ Cs. tataḥ, bhagavatprāptānti / (tataḥとは、至尊者によって達成されたもろもろのものを、という意味である)

<sup>31</sup>P.,K.: ātmaprāptānti ca tato jānanti B. ātmaprāptānti ca tataḥ prāpnuvanti

<sup>32</sup>P. taṃ namayasyanti B.,K.: tān namasyanti

<sup>33</sup>ye hīnāḥ saptadaśabhir guṇaiḥ karmabhir eva ca Cn. saptadaśabhiḥ, pañcapraṇamanobuddhidaśendriyaiḥ, guṇaiḥ sattvādibhiḥ, karmabhiḥ śuklakṛṣṇaiḥ / (saptadaśabhiḥとは、五種の氣息、マナス、ブッディ、十の感官, guṇaiḥとは、サットヴァなど, karmabhiḥとは、もろもろの善悪の行為であり、それらのなくなった、という意味である) Cs. mahābhūtaikādaśendriyāhamkārakṣaṇaiḥ / ((saptadaśabhiḥとは、(五) 大元素、十一の感官、自我意識を特徴としてもつものを、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: another passage alluding to the seventeen, p.167.5.

<sup>34</sup>kalāḥ pañcadaśa tyaktvā Ca. kalāḥ pañcadaśa, bhūtānām pañcacatustriḍvyekaguṇatvenopādhibhedāc chabdādāya eva guṇāḥ kalāḥ, tāś tyaktvā, bhūtāni jītvety arthaḥ / (kalāḥ pañcadaśaとは、諸元素は、条件の相違によって、五、四、三、二、一のグナをもつので、音声などの諸グナが、kalāḥ 諸部分である。それらを、tyaktvā 捨てて、というのは、諸元素に勝って、という意味である) Cp. pañcadaśa kalāḥ, prāṇādipañcakanāgākūrmakṛkaradevattadhaṇamjayabhūtapañcakarūpāḥ / (pañcadaśa kalāḥとは、プラーナなどの五種、蛇風・亀風・シャコ風・法螺貝風・腹中火風(の五種)、五種の元素、これら(十五)の姿をもつものたちである) Cs. trayo guṇāḥ, pañca viśayāḥ, icchā dveṣaḥ sukhaṃ duḥkhaṃ saṃghātaś cetanaḥ dhṛtiḥ / ((pañcadaśa kalāḥとは) 三種のグナ・五種の対象・願望・嫌悪・快・苦・身体(?)・意識・堅固である) Cf.Hopkins[1902]: *kalā sūkṣmā*, the pure soul, p.135.16.

<sup>35</sup>kṣetrajña iti kalpitaḥ Cs. kṣetrajñāḥ, sarvabhūtātmā paramēśvaraḥ / (kṣetrajñāḥとは、あらゆる生き物の本質であり、最高の自在者である)

<sup>36</sup>P. sarvagaś caiva B. sarvaguṇaś caiva K. sarvagatiś caiva

<sup>37</sup>dr̥ṣyate jñānayogena āvām ca prasṛtau tataḥ Cs. jñānam eva yogaḥ jñānayogaḥ / (知識こそがヨーガであるものが jñānayoga である) Cn. prasṛtau, nirgatau / (prasṛtauとは、現れた、という意味である) Sandhi irregular: *jñānayogena āvām* Cf.Oberlies[Grammar]: Absense of *savarna-sandhi*, p.2.11.

<sup>38</sup>P.,K.: nānātanusamāsthitaḥ B. nānāmatasamāsthitaḥ

<sup>39</sup>P. ādyaṃ gatim caisām B. āśu gatim caisām K. adya gatim caisām

<sup>40</sup>ye tu tadbhāvitā loke ekāntitvaṃ (B.,K.: loke hy ekāntitvaṃ) samāsthitaḥ Cs. tadbhāvitāḥ, bhagavaddhyānaśamskṛtāḥ / (tadbhāvitāḥとは、至尊者の瞑想によって浄化された者たちは、という意味である) (Sandhi irregular: *loke ekāntitvaṃ* Cf.Oberlies[Grammar]: Absense of *udgrāha-sandhi*, 1.1.4.5. -e e-, p.18.16)

- (43) このように、信愛と愛情とによって、秘密の教えが汝に語られた、ナーラダよ。梵仙よ、汝は、我々に対する信愛によって<sup>41</sup>聞くことができたのである。

[322章] (B.335章<sup>42</sup>, C.12696-12751, K.343章) (ナーラーヤナ章 (2) Uparicara 王と聖典の継承

ビーシュマは言った。

- (1) 最高のブルシャであるナーラーヤナによって<sup>43</sup>、このように言われた二本足の者たちの中の最高者(ナーラダ)は、二本足の者たちの中の最高者、世界の幸福の住居である<sup>44</sup>ナーラーヤナに次の言葉を語った<sup>45</sup>。(韻律: Upajāti)
- (2) アートマンより生まれた方よ、御身の最高の誕生が<sup>46</sup>ここダルマの家において四種になされた目的が、世界の幸福のため、達成されなければなりません。今私は、御身の最初の姿を<sup>47</sup>見に参りません。(韻律: Upajāti)
- (3) 私は、もろもろのヴェーダをよく理解し、苦行を行い、かつて嘘をついたことはありません、世界の保護者よ。私は、常に師匠方の供養を行います。そして他人の秘密はこれまで洩らしたことはありません<sup>48</sup>。(韻律: Upajāti)
- (4) 私は、伝承に従い、四つを守っています<sup>49</sup>。私は、常に敵にも友にも等しく振舞います。私は、常にかの原初の神を奉じ、専一の心によって永遠に愛しています。これらの優れた行為によって心清められた私が、どうして無限の神を見ないことがありましようか。(韻律: Upajāti)
- (5) そのパラメーシュティンの子孫の言葉を聞いて、サートヴァタの教法を守る<sup>50</sup>ナーラーヤナは、自らの規定によるもろもろの行為によって<sup>51</sup>礼拝した後、「行くがよい」とナーラダに言った。(韻律: Upajāti)
- (6) そこから送り出されたパラメーシュティンの息子は、その太古の聖仙を礼拝した後、最高の勢いをもって<sup>52</sup>空中に飛び上がった。そしてすぐにメール山頂に降り立った。(韻律: Upajāti)

<sup>41</sup>vipraṛṣe asmadbhaktiyā Sandhi irregular: vipraṛṣe asmadbhaktiyā Cf.Oberlies[Grammar]: Absense of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. -e a-, p.20.2.

<sup>42</sup>Hopkins[1910]: The Puranic system of Manus and *manvantaras* is unknown to the early epic. The Anuśāsana, ..., knows it well; and so do the later (335-350) Parvans of Śānti..., p.373.35.

<sup>43</sup>nārāyaṇenottarapūruṣeṇa Cf.Matsubara[1994]: *uttamapurūṣa* applied to Nārāyaṇa, p.80.2.

<sup>44</sup>lokahitādhivāsam Cs. lokeṣu hitam adhvāsayaṭīti lokahitādhivāsam / (諸世界において幸福に住まわせる, から lokahitādhivāsam とされる) Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa addressed as *lokahitādhivāsa*, p.130.14.

<sup>45</sup>B.,K. は次の詩節の前に nārada uvāca を挿入している。

<sup>46</sup>P. janma tavottamaṃ B. janma kṛtaṃ tvayā K. janma tvayottamaṃ

<sup>47</sup>prakṛtiṃ tavādyāṃ Ca. ādyāṃ prakṛtiṃ, nārāyaṇākhyam / (ādyāṃ prakṛtiṃ とは、ナーラーヤナと呼ばれる, という意味である) Cn. śvetadvīpsthāṃ / (シヴエータドヴィーパ(白い島)にいる, という意味である) Cv. aniruddhākhyam / (ア Nilgga と呼ばれる, という意味である)

<sup>48</sup>B. は P.,K. の ab 句を cd 句に, cd 句を ab 句にしている。

<sup>49</sup>guptāni catvāri upastham, udaraṃ, pāṇipādaṃ, vāk ceti catvāri / (性器, 腹, 手足, 言葉という四種である) Cn.,Cp.: pāṇipādodaropasthāni / (手, 足, 腹, 性器の四種である) Cs. vākpānyudaropasthāni / (言葉, 手, 腹, 性器の四種である)

<sup>50</sup>P. sātvatadharmagoptā B.,K.: śāśvatadharmagoptā (Cf.BhG.11.18) Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, addressed as sātvatadharmagoptā, pp.130.13, 147, No.40.

<sup>51</sup>P.,B.: ātmaavidhikriyābhiḥ K. vidhivatikriyābhiḥ

<sup>52</sup>P. uttamavegayuktas B.,K.: uttamayogayuktas

叙事詩の宗教哲学

- (7) 聖者(ナーラダ)は、山頂の閑寂の地に座って、そこにしばらく留まった。そして北西を見ている時<sup>53</sup>、大変不思議な形をしたものを見た。(韻律: Upajāti)
- (8) 乳海の北に「白い島」という名の<sup>54</sup>広大な島が広がっていた。(その島は)詩人たちによって、メー  
ル山より三万二千ヨージアナ彼方にある<sup>55</sup>と語られている。(韻律: Upajāti)
- (9) そこに住む人々は、感官を超え<sup>56</sup>、食事せず、動作なく<sup>57</sup>、よい香りを発し、色白く<sup>58</sup>、あらゆる罪を離れており、悪行をなす人々の眼を見えなくしている (cakṣurmuṣaḥ)。(韻律: Upajāti<sup>59</sup>)
- (10) (彼らは)金剛の骨と体をもち、等しい身長と体重をもち<sup>60</sup>、神の子孫の姿をしており<sup>61</sup>、吉祥な力 (sāra) をそなえ、頭は傘の形であり<sup>62</sup>、雲の群の(ごとき)声を発し、美しい蓮のごとき四本の腕をもち、百の蓮の(ように縞模様のある)足をしている<sup>63</sup>。(韻律: 不明<sup>64</sup>)
- (11) (彼らは)白い六十本の歯をもち、そして八本の牙をもち<sup>65</sup>、いくつかの舌で<sup>66</sup>太陽のごとくあらゆる方向から顔を嘗めることができるのである<sup>67</sup>。
- (12) (彼らは)一切を生じた神を、信愛によって<sup>68</sup>(礼拝している)。その神からあらゆる世界が生じた

<sup>53</sup>ālokayann uttarapaścimena Cf.MBh.XII.326.56 (samudre paścimottare)

<sup>54</sup>dv=ipaḥ śvetāḥ sa nāmnā Cf.Hopkins[1910]: the description of the White Island, Śveta Dvīpa, otherwise known only from the Purāṇas (including the Harivaṃśa), p.372.12.

<sup>55</sup>meroḥ sahasraīḥ sa hi yojanaānaṃ dvātriṃśatorhdvā Cf.Hopkins[1902]: an example (of the ablative used to estimate distance to a certain extent), united with the instrumental, p.151.16.

<sup>56</sup>P. atīndriyāś B.,K.: anīndriyāś

<sup>57</sup>niṣpandahīnāḥ Cs. niṣpal[?śya]ndahīnāḥ, mūtrapurīṣavarjitāḥ / (niṣpandahīnāḥとは、大小便をしない、という意味である) Gangulī(p.118.19), Deussen(p.753, v.9)とも「まばたきしない」と解している。

<sup>58</sup>śvetāḥ pumāmsō Cf.Hopkins[Great Epic]: The “white men” of the White Island, ..., must be Kashmere Brahmans, p.116.7, 15.

<sup>59</sup>a 句 d 句の休止位置が第 4 音節のあとになっている。Hopkins[Great Epic] は、P.9cd 以下次の詩節を散文とみなしている。(p.267.1)

<sup>60</sup>samamānonmānā Cs. samamānonmānāḥ, sadṛśyāmavistāronmānāyuktāḥ / (samamānonmānāとは、等しい長さ、幅、高さをもった、という意味である)

<sup>61</sup>P. divyāvayavarūpāḥ B.,K.: divyāvayavarūpāḥ

<sup>62</sup>chattrākṛtīśīrṣā Cn. chattrākṛtīśīrṣāḥ, nirmāṃsagīvatvāt / (chattrākṛtīśīrṣāḥは、肉のない首をしているためである)

<sup>63</sup>P. satpuṣkaracatuṣkā rājīvaśatapādā B.,K.: samamuṣkacatuṣkā rājīvacchadapādāḥ

Ca. samuṣkacatuṣkāḥ, caturvṛṣaṇayutāḥ / (samuṣkacatuṣkāḥとは、四つの陰囊をもつ、という意味である)

Cn. samam, (pīnatvarahitam) muṣkau (vṛṣṇau) catuṣkaṃ (aṃsayoḥ kaṭyoś cāntarāḥ, bāhucatuṣkaṃ vā) ca yeṣām / muṣkau bāhū (catuṣkaṃ) śuṣkaṃ kāṣṭhatulyaṃ yeṣām / rājīvaśatapādāḥ rājīvatyaḥ, pañktiyuktāḥ śirorekḥāḥ, tāsām śatair yuktāḥ pādāḥ / (samam, すなわち、太っておらず、muṣkau, すなわち、二つの陰囊, catuṣkaṃ, すなわち、両肩と両腰の中間部分、あるいは、四本の腕、これらを彼らもっている。彼らの二つの陰囊と(四本の)腕は、木のように干からびている。rājīvaśatapādāḥとは、rājīvatyaḥ, すなわち、列になった頭頂の縞(?), それを彼らの足は百もっている、という意味である)

Cs. rājīvat sitapādāḥ, rājīrekḥābhīḥ sitā baddhāḥ pādā yeṣām / (rājīvat sitapādāḥとは、彼らは、もろもろの縞の線と, sitā, すなわち、結びついた、足をもっている、という意味である)

<sup>64</sup>a 句 11 音節, b 句 12 音節, c 句 12 音節, d 句 14 音節。 Hopkins は第 9 詩節 cd 句からのテキストを散文とみなしている。(Hopkins[Great Epic], p.267.2)

<sup>65</sup>ṣaṣṭyā dantair yuktāḥ sukḥlāir aṣṭābhīr daṃṣṭrābhīr ye Cn. ṣaṣṭyā, ṣaṣṭīsaṃkhyair dantair iva jagaccanaḥacarvanakṣamāiḥ, saṃvatsarair yuktāḥ / (ṣaṣṭyāとは、六十という数の歯によってのごとく、世界中の豆を噛むことのできる年をそなえた、という意味である) Cv. ṣaṣṭyā dantair, dantānām atisūṣmatvāt ṣaṣṭītvam / tasmād ūrdhvam adhaś catvāś catvāro daṃṣṭrāḥ / (ṣaṣṭyā dantaiḥとは、もろもろの歯があまりに小さいので六十本である。そのため上下に四本づつの牙がある、という意味である) Cn. aṣṭau diśāḥ sarveṣām āśrayabhūtās tābhīś ca yuktāḥ / deśakāḥ ca yeṣām mukhamadhye praviṣṭāv ity arthaḥ / (aṣṭauとは、もろもろの方位である。あらゆるものが依存しているものはそれらと結びついている。場所と時間の両者が、彼らの顔の真ん中に入っている、という意味である) P.,B.,K.とも b 句は 7 音節でできている。

<sup>66</sup>jīhvābhīr ye Cn. jīhvābhīr iva svāṅgabhūtābhī rasanāśaktibhiḥ / (jīhvābhīḥとは、自分の手足となったかのごとき、もろもろの舌の能力によって、という意味である)

<sup>67</sup>P. viṣvag vaktraṃ lelihyante B.,K.: viśvavaktraṃ lelihyante Cs. jīhvādaīrghyān mukhamaṇḍalaṃ pariledhūṃ samarthā ity arthaḥ / (舌が長いので、顔の面を嘗めることができる、という意味である)

<sup>68</sup>P. bhaktiyā devaṃ viśvotpannaṃ B.,K.: devaṃ bhaktiyā viśvotpannaṃ Cs. viśvotpannaṃ, āhitāgnyādivat paranipātāḥ

のである<sup>69</sup>。もろもろのヴェーダ、もろもろのダルマ、寂靜に至った聖者たち、神々は、すべて神の創造物である<sup>70</sup>。

ユディシュティラは言った。

- (13) 感官を超え<sup>71</sup>、食事をとらず、動作なく、よき香りを放つこれらの人々は、どのように生まれたのですか。また彼らの最高の行き先はどこですか。
- (14) この世で解脱した人々の特徴は、バーラタ族の最上者よ、白い島に住む人々のようなのですか。
- (15) どうか私の疑問を断ち切って下さい。私の好奇心は大きいのです。貴方は、あらゆる物語の森です。私たちは、貴方を頼りとしています。

ビーシュマは言った。

- (16) この広大な物語は、王よ、私が父の近くで聞いた。それが汝に語られねばならない。なぜならば、それは物語の核心であると伝えられているからである<sup>72</sup>。
- (17) ウバリチャラという名の王がいた。地上の支配者であり、インドラの友であり<sup>73</sup>、ハリ・ナーラーヤナを (nārāyaṇam harim) 信愛していた (bhaktaḥ) ことで知られていた。
- (18) 彼は、ダルマにかない、いつも怠けることなく、祖霊たちを信愛するのを常としていた。彼はかつて、ナーラーヤナ神の恩寵によって、(地上の) 統治権を獲得した。
- (19) (彼は) かつて太陽神の口から発せられたサートヴァタの (祭式の) 規定に立って<sup>74</sup>、神々の主を礼拝し、その (供養の) 残余によって<sup>75</sup> 祖霊たちを礼拝した。
- (20) 彼は、祖霊の (供物の) 残余を、パラモンたちに、そして従僕たちに、分け与えた後、残った食べ物を食べ、真実に専心し (satyaparāḥ), あらゆる生き物に危害を加えず、全霊で神々の神ジャーナルダナを信愛した<sup>76</sup>。

(Pāṇ.2.2.37) / pañcamyarthe bahuvrīhiḥ / (viśvotpannam は、āhitāgni などの複合語のように不規則な後置であり (Pāṇ.2.2.37)、尊格の意味での所有複合語である) Cv. (reading *viśvāviśvotpattyavyayam*) *viśvāviśvānām muktāmuktānām, utpattyavadhi avyayam, vyayarahitam / devam ārdhayantiti yogyakriyādhyāhārah / (viśvāviśvānām, すなわち、解脱した者たちとしていない者たちの, utpatti 発生までは, avyayam, すなわち、消滅しない、という意味である。devam(の語の後に)、敬う、というような適切な所作が補われるべきである)*

<sup>69</sup>P. yasmāt sarve lokāḥ sūtāḥ B.,K.: yasmāt sarve lokāḥ samprasūtāḥ この後に K. は次の 11 音節の句を挿入している。

sarvagātrās ca sūkṣmāḥ sahāṅgā / (すべての支分をもち、部分を伴った、微細な、)

<sup>70</sup>P. sarve tasya visargāḥ B. sarve tasya nisargāḥ K. sarve tasya nisarga iti

この詩節の韻律は不規則である。P. は a,b 句 8 音節, c,d 句 9 音節。B. は a 句は 8 音節, b 句 10 音節, c,d 句は 9 音節。K. の該当部分は、それぞれ 8 音節, 10 音節, 11 音節, 9 音節となっている。Hopkins の指摘を考慮すると、P. の第 9 詩節 cd 句から第 12 詩節は、散文とみなすことができよう。(Cf. Hopkins[Great Epic], pp.267.1, 353.2)

<sup>71</sup>P. atīndriyā B.,K.: anīndriyā Cf. MBh. XII.323.25cd

<sup>72</sup>P. kathāsāro hi sa smṛtaḥ B.,K.: kathāsāro hi sā matā Cf. Hopkins[Great Epic]: So the Çvetadvīpa story is a kathāsāra, p.51.4. K. はこの後に次の 2 行を挿入している。(=MBh. XII.802\*)

śantanoh kathayāmāsa nārādo munisattamaḥ / (最上の聖者ナーラダは、シャンタヌ王に語った。)

rājñā prṣṭaḥ purā prāha tatrāhaṃ śrutavān purā / (かつて王に尋ねられた時「そのことをかつて私は聞いた」と。)

<sup>73</sup>ākhaṇḍalasakhaḥ Cf. Hopkins[Great Epic]: *ākhaṇḍala*, an epithet of Indra, p.140, fn.2.

<sup>74</sup>sātvataṃ vidhim āsthāya N. sātvataṃ sātvatānām pañcarātrāṇām hitaṃ / (sātvataṃ とは、サートヴァタたち、すなわち、パンチャラートラ派の人々に対して、規定された、という意味である)

<sup>75</sup>taccheṣeṇa N. taccheṣeṇa, viṣṇuṣeṣeṇa / (taccheṣeṇa とは、ヴィシュヌの残余によって、という意味である)

<sup>76</sup>B.,K. は、この後に次の一行を挿入している。(=MBh. XII.803\*)

anādimadhyanidhanaṃ lokakartāram avyayam / (始まりも中間も終わりもない、不変の世界創造者 (であるジャーナルダナ) を)



## 叙事詩の宗教哲学

- (21) このナーラーヤナに信愛 (bhakti) を運ぶ者に、敵に苛酷な者よ、神々の王インドラは<sup>77</sup>自ら、一つの寝台と座席を与えた。
- (22) 自分、国家、財産、妻、象たち<sup>78</sup>、このすべては至尊者のために<sup>79</sup>、と常に(王は)このように考えていた<sup>80</sup>。
- (23) (ウパリチャラ王は) 願いによって行うにせよ、たまたま行うにせよ、常に<sup>81</sup>、祭式に関する最高の行為はすべて、サートヴァタの規定に立って、心集中して行った。
- (24) その偉大な王の家では<sup>82</sup>、パンチャラートラを知るすぐれた者たちが<sup>83</sup>、至尊者へと捧げられた食べ物を最上の食べ物として、食べたのである。
- (25) 国家をダルマによって統治し、敵を苦しめるこの王には、偽りの言葉 (vāc) は生じることなく、悪しき心 (mano duṣṭam) もなかった。そして彼は、身体によって極微粒子ほどの悪も行うことはなかった。
- (26) 実にチトラシカンディンとして知られる七人の聖者がいた。彼らは心を一つにして (tair ekamatibhir bhūtṅvā), かの最高の聖典を (śāstram) 説いた<sup>84</sup>。(Cf.MBh.XII.323.3)
- (27) マリーチ、アトリとアンギラス、プラストヤ、プラハ、クラトゥ、大きな光輝をもつヴァシシュタ、これらがチトラシカンディンである。(Cf.MBh.XII.321.33, 327.29, 327.61)
- (28) これらは七人のプラクリティ (prakṛti 創造者) である<sup>85</sup>。そして八番目はスヴァーヤムブヴァ(自存者) である。世界は彼らによって維持されており、彼らから聖典は生じたのである。
- (29) 聖者たちは、心を一点に集中し、自制し、制御に喜んだ<sup>86</sup>。『善とはこれこれであり、ブラフマンとはこれこれであり、最高の幸福とはこれこれである』と、注意深く (manasā) 考えて、もろもろの世界を、そしてそれから聖典を創造した (pracakrire)。
- (30) そこでは、ダルマと利益と愛欲が、そして後に解脱が語られた。そして種々の道徳 (maryādā) も天と地において確立された。

<sup>77</sup>P. śakro B.,K.: devo

<sup>78</sup>P. vāhanāni ca B.,K.: vāhanam tathā

<sup>79</sup>P. etad bhāgavate sarvam iti B.,K.: yat tad bhāgavatam sarvam iti

<sup>80</sup>P. prekṣitam sadā B. prekṣitam sadā K. prekṣitam sadā

<sup>81</sup>P. kāmānaimittikājasraṃ B.,K.: kāmānaimittikā rajan Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8.Double sandhi, 1.8.7. -ā- < /-ās a-/, kāmānaimittikā ajasraṃ, p.43.14.

<sup>82</sup>tasya gehe mahātmanaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: b 句 tasya gehe mahātmanaḥ, gehe for gr̥ha, to avoid triambus in an even pāda, p.263.26.

<sup>83</sup>pañcarātravido mukhyās Cf.Hopkins[Great Epic]: ekantinas are identified with the Pañcarātras, p.143.22.

<sup>84</sup>proktaṃ śāstram uttamam Cf.Hopkins[Great Epic]: The seven Citraçikhaṇḍins are referred to as the author of the Pañcarātra Çāstra, p.144, fn.1.

B.,K. はこの後に次の詩節を挿入している。(=MBh.XII.804\*)

vedaiḥ caturbhiḥ samitam kṛtam merau mahāgirau / (偉大な山メール山において、四つのヴェーダに一致して作られた)

āsyaiḥ saptabhir udgīrṇam lokadharmam anuttamam / (最高の世間の法が、この七人の口から発せられた。)

<sup>85</sup>sapta prakṛtayo hy etās Cn. sapta prakṛtayo mahadahaṃkārādīmūrtayāḥ, svāyambhuvā tu mūlaprakṛtir eva / (sapta prakṛtayaḥ とは、大、自我意識などの諸形態である。svāyambhuvā とは、根本原質である)

<sup>86</sup>B.,K. とともに ab 句の後に次の一行を挿入している。

bhūtabhavyabhaviṣyajñāḥ satyadharmaparāyaṇāḥ / (過去・現在・未来を知り、真実のダルマに専念した。)

- (31) 彼らは皆、聖仙たちと共に<sup>87</sup>、神々の千年の間、苦行によって最高神ハリ・ナーラーヤナを敬った後に（聖典を創造した）。
- (32) その時、（言葉の）女神サラスヴァティーは、ナーラーヤナに指示され、もろもろの世界の幸福を願って、この聖仙たちすべてに入った。
- (33) それ故、苦行を知るパラモンたちによって、この最初の創造において生まれた（言葉は）<sup>88</sup>、音において、意味において、論理において、正しく用いられたのである。（Cf.Hopkins[Great Epic]: the poem was regarded as an artistic poem, Kāvya, per se. So the psuedo-epic vaunts its own literary finish: *çabde cā 'rthe ca hetau ca eṣā prathamāsarḡajā (sarasvatī)*, p.368.13)
- (34) 冒頭に聖音オームの音によって飾られたその聖典は、この慈悲深い神のいます所で、聖仙たちによって作られた。
- (35) その時、どんな身体にも至る (anirdiṣṭaśarīragah), 清浄至尊の最高のプルシャは、姿の見えないまま、その聖仙たち皆に言った。
- (36) 一万の詩節からなる最上のこの聖典が<sup>89</sup>作られた。これによって、世界の秩序 (lokatantra) 全体に、ダルマが生じるであろう。
- (37) それは、活動と（行為の）停止における源 (yoni) となるであろう。そしてそれは、リグ・ヤジュル・サーマ、そしてアタルヴァ・アンギラスの（四ヴェーダの）意にかなったものとなるであろう。
- (38) そして基準に従って<sup>90</sup>、余は余の恩寵から生まれたブラフマー神を創造した。ルドラ神は（余の）怒りから生じた。パラモンたちよ、汝らは創造者 (prakṛtyas)(として余が創造したの) である。
- (39) 太陽と月、風、地、水たち、そして火、星の群すべて、そして存在 (bhūta) と名づけられるもの（が創造された）。
- (40) ブラフマンを語る者たちは、各々もろもろの職務において存在している (adhikārṣu vartatnte)。彼らは皆、基準である。同様にして、その最高の聖典も、
- (41) 基準となるであろう。これが余の教え (anuśāsana) である。これによって、自存のマヌは自ら数々のダルマを説くであろう<sup>91</sup>。
- (42) ウシャナスとプリハスパティが<sup>92</sup>将来生まれるであろうが、生まれた時には、汝らの種々の考えによって作られた聖典を説くであろう。

<sup>87</sup> sarve te ṛṣibhiḥ saha Sandhi irregular: *te ṛṣibhiḥ* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.4. Absence of *udgrāha-sandhi*, 1.1.4.4. *-e ṛ-*, p.18.11.

<sup>88</sup> ca eṣā prathamāsarḡajā Sandhi irregular: *ca eṣā* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśiṣṭa-sandhi*, p.12.12.

<sup>89</sup> P.,B.: idam uttamam K. hitam uttamam Cf.Hopkins[Great Epic]: a primeval code, anuśāsana, of 10,000 çlokas, gives rise to the laws, p.18.17.

<sup>90</sup> P. tathā pramāṇam hi B.,K.: yathāpramāṇam hi

<sup>91</sup> pravakṣyate dharmān manuḥ svāyambhuvah svayam Cf.Hopkins[Great Epic]: reference to the code of Manu, p.18.17.

<sup>92</sup> uśanā bṛhaspatiś caiva / (9 syllables) Cf.Hopkins[Great Epic]: The Hypermetric Çloka, p.255.20; dharmāçāstra made by Uçanas and the opinions of Bṛhaspati, p.18.22.

## 叙事詩の宗教哲学

- (43) スヴァーヤムブヴァが数々のダルマを(作り)、ウシャナスが聖典を作り、ブリハस्पティの考えが、人々に広まった時、
- (44) 汝らによって作られたこの聖典を、人々の守護者ヴァス王(ウパリチャラ)は、ブリハस्पティから手に入れるであろう、すぐれたパラモンたちよ。
- (45) 余に傾倒するこの王は<sup>93</sup>、余を信愛するであろう。(この王は)この聖典によって、世間の人々の間ですべての祭式(kriyā)を行うであろう。
- (46) この聖典は、すべての聖典の<sup>94</sup>聖典として最上のものと呼ばれるであろう。それは、利益に関し、ダルマに関し、名誉に関し<sup>95</sup>、最もすぐれたものである。
- (47) この(聖典の)展開によって、汝らは、子孫に富む者たちとなろう<sup>96</sup>。そしてかの偉大な王ヴァスは幸福と結びつくであろう。
- (48) しかし、この王が死んだ時、この永遠の聖典は消えるであろう。このようにこの真実を<sup>97</sup>、余は汝らに語った。
- (49) これだけの言葉を言って、姿の見えない最高のブルシャは、これらすべての聖仙をおいてどこかに去った。
- (50) それから彼ら世界の父たちは、あらゆる世界の利益を考え、このダルマの源である永遠の聖典を広めた。
- (51) 最初に創造されたユガ期に、アングラスの息子ブリハस्पティが生まれた時<sup>98</sup>、この聖典を、支分とウパニシャッドと共に、ブリハस्पティのところに置いて、
- (52) (七人の聖者たちは)精神集中によって<sup>99</sup>すべての人々にすべてのダルマを広めようと、苦行を行う決心をして、それぞれ望む所へと去った。

### [323章] (B.336章, C.12752-12817, K.344章) (Nārayaṇa章(3)ブリハस्पティのエピソード

ビーシュマは言った。

- (1) 大劫が去り<sup>100</sup>、アングラスの息子(ブリハस्पティ)が生まれると<sup>101</sup>、神々は、神の祭官が誕生したことを喜んだ。

<sup>93</sup>P. madbhāvito rājā B. sadbhāvito rājā K.: sadbhāvanirato

<sup>94</sup>P. sarvaśāstrāṇām B.,K.: yuṣmacchāstrāṇām

<sup>95</sup>P. yaśasyaṃ B.,K.: rahasyaṃ

<sup>96</sup>P.,K.: prajāvanto B. prajānanto

<sup>97</sup>P. tat satyam B.,K.: tat sarvam

<sup>98</sup>P. utpanne 'ṅgirase B. utpanne 'ṅgirase K. utpanne 'ṅgirase Ca. utpanne 'ṅgirase, bṛhaspatau jāte / āṅgirase iti ākāralopaś cchāndasaḥ / (utpanne 'ṅgirase とは、ブリハस्पティが生まれた時、という意味である。āṅgirase の(語頭の)長母音 ā が消失するのは古形である) Cf. Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of *sandhi*, 1.2.6. -e ' < /-e ā-/ , p.28.16.

<sup>99</sup>P. dhāraṇāt B.,K.: dhāraṇāḥ

<sup>100</sup>tato 'tīte mahākalpe Cs. mahākalpe, pūrvasyāṃ hiranyagarbharātryām / (mahākalpe とは、以前のヒラニヤガルバの夜に、という意味である) Cf. Hopkins[1903]: Only the later epic knows the Mahā-kalpa by name, p.45.11, MBh.XII.326.104.

<sup>101</sup>utpanne 'ṅgirasah sute Ca. utpanne 'ṅgirasah sute, bṛhaspatāv utpanne devānām paurohityaṃ prāpte / (utpanne 'ṅgirasah sute とは、ブリハस्पティが生まれたので、すなわち、神々にとってプローヒタ祭官たることが得られたので、という意味である)

- (2) ブリハト (強い), プラフマ (神聖), マハト (偉大な), というこれらの言葉は, 同義語である<sup>102</sup>。これらの性質 (guṇaiḥ) を賢者ブリハスパティはもっていたのである, 王よ。
- (3) ウバリチャラ王, 別名ヴァスは, 彼の最も優れた弟子となった。そして, チトラシカンディンによって作られた聖典を正しく学んだ<sup>103</sup>。(Cf.MBh.XII.322.26)
- (4) このヴァス王は, すでに神聖な (祭式の) 規定によって清められ, インドラが天を守ったように<sup>104</sup>, 地を守った。
- (5) この偉大な王の時, 大祭アシュバメーダ祭が行なわれた。師ブリハスパティは<sup>105</sup>そこでホートリ祭官となったということだ。
- (6) この時, プラジャーパティの三人の息子たちはサダスヤ祭官となった。エーカタ, ドヴィタ, トリタの三人の偉大な聖仙たちである。
- (7) (5) ダヌシャークシャ<sup>106</sup>, (6) ライビヤ, (7) アルヴァーヴァスと (8) パラーヴァス<sup>107</sup>, (9) 聖仙メーダーティティ, (10) 大仙ターンディヤ<sup>108</sup>,
- (8) (11) 大きな幸運をもちヴェーダシラスとも言われる聖仙シャクティ<sup>109</sup>, (12) シャーリホートラの父である<sup>110</sup>偉大な聖仙カピラ<sup>111</sup>,
- (9) (13)(カタ派の) 創始者カタ<sup>112</sup>, (14) ヴァイシャンパーヤナの兄タイッティリ, (15) カンヴァ, そして (16) デーヴァホートラの, 以上十六人が (祭官として) 名前を挙げられている<sup>113</sup>。この大祭に必要なものはすべて集められたのである, 王よ。
- (10) そこでは家畜の殺害は起こらなかった<sup>114</sup>。かの王はそうのように決意していたからである。王は, 殺生せず, 清浄にして, 慈悲あり (akṣudra)<sup>115</sup>, 願望なく, 祭式を賞賛していた。そこで準備された

<sup>102</sup>brhad brahma mahac ceti śabdāḥ paryāyaavācakāḥ / Cf.Hopkins[Great Epic]: they (Rudra and Viṣṇu) are synonyms like brhad brahma and mahat, p.97, fn.2.

<sup>103</sup>adhītavāms tadā śāstaṃ samyak citraśikhaṇḍijam Cf.Hopkins[Great Epic]: The seven Citraśikhaṇḍins, the author of the Pañcarātra Āstra, p.144, fn.1.

<sup>104</sup>divam ākhandalo yathā Cf.MBh.XII.325.4.108; Hopkins[Great Epic]: ākhaṇḍala, still an epithet of Indra, p.140, fn.2.

<sup>105</sup>brhaspatir upādhyāyas Cf.Hara[1980]: upādhyāya appeared in the ritual context, p.112, fn.45.

<sup>106</sup>P. dhanuśākṣo B.,K.: dhanuśākhyo

<sup>107</sup>raibyaś ca arvāvasuparāvasū Sandhi irregular: ca arvāvasuparāvasū Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of savarṇa-sandhi, 1.1.1.1. -a/ā a/ā, p.2.11.

<sup>108</sup>tāṇḍyaś caiva mahān ṛṣiḥ Cf.Hopkins[Great Epi]: Divisions of Veda, Other Brāhmaṇas may be implied in the list at xii.337, 7ff (=MBh.XII.323.7ff), Tāṇḍya(v.7), Kāṭha(v.9), Kaṇva(v.9), Taittri(v.9), p.7.34.

<sup>109</sup>P. śaktir B.,K.: śāntir

<sup>110</sup>P. śālihotrapitāmahaḥ B.,K.: śālihotrapitā smṛtaḥ Ca. kapilaḥ, śālihotrasya pitā / (kapilaḥとは, シャーリホートラの父は, という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: Kapila, father of Čālihotra, p.98, fn.1.

<sup>111</sup>P. kapilaś ca ṛṣiśreṣṭhaḥ B.,K.: ṛṣiśreṣṭhaś ca kapilaḥ Sandhi irregular: kapilaś ca ṛṣiśreṣṭhaḥ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.3. -a/ā ṛ-, p.9.12.

<sup>112</sup>ādyah kathaś Ca. ādyah kathaśākhādarśī / (ādyahとは, (ヤジールヴェーダの) カタ派を作った, という意味である)

<sup>113</sup>ca ete śodaśa kīrtitāḥ Sandhi irregular: ca ete Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.4. -a/ā e-, p.12.12.

<sup>114</sup>na tatra paśughāto 'bhūt Critical Notes: Absence of paśughāto is considered as a point of affinity between the Pañcarātra and Avestic religion (cf.12.806\*). (Critical Notes, P.vol.16, p.2224(right), v.10)

<sup>115</sup>ahiṃsraḥ śucir akṣudro Cf.Hopkins[Great Epic]: ahiṃsā doctrine of the later epic, "he did no harm to any living thing, he was pure and not cruel" (akṣudra = akrūra), p.377.17.; Matsubara[1994]: ahiṃsā, one of the most important teachings in the Pañcarātra, p.147, Reference No.38.

叙事詩の宗教哲学

ものは、アーラニヤカの語句に詠われた<sup>116</sup>(祭式に)必要なものであった (bhāgāh)。

- (11) そのため太古からの至尊なる神々の神は、王に満足して、他の誰にも見えない姿を、王にはっきりと示したのである。
- (12) そして神は、自分の分け前を嗅ぎとり、供物をとった。神ハリメーダスは<sup>117</sup>、姿を見せることなく(供養の)取り分を持ち去ったのである。
- (13) するとプリハスパティは怒って、勢いよく(祭式の)小匙を<sup>118</sup>投げ上げた。小匙は虚空にあたって落ちたので(?)、(プリハスパティは)怒りのために多くの涙を流した<sup>119</sup>。
- (14) そして(プリハスパティは)ウパリチャラ王に言った。「この私が提供した(供物の)取り分は、神自身によって私の眼前で取られたのであろう。このことは疑いはない。」
- (15) 提供された祭式の取り分は、神々は(プリハスパティの)眼前で(姿を現して)手に入れるものだ。どうして、ここで主ハリ神は姿を現さなかったのだらう<sup>120</sup>。
- (16) すると、偉大な地上の守護者ヴァス王は、そしてサダスヤ祭官たちも、あらゆる点から、興奮したかの聖者(プリハスパティ)を静めた<sup>121</sup>。

<sup>116</sup>P. āraṇyakapadodgītā B.,K.: āraṇyakapadodbhūtā (荒地地に育ったもの) Cs. āraṇyakapadodgītāḥ, upaniṣadvākyaprokṭā bhāgāḥ piṣṭapuroḍāśādayaḥ / (āraṇyakapadodgītāḥとは、ウパニシャッドの文章に言われている、という意味であり、bhāgāḥとは、小麦粉の供物などである) Cf.Hopkins[Great Epic]: rare mention of Āraṇyaka, p.9.9.

<sup>117</sup>devena harimedhasā Cs. harim ādityam edhayatīti harimedhāḥ, chāndaso mumāgamaḥ / (harim, すなわち、太陽を, edhayati 増大させるから harimedhāḥ ハリメーダスは、と言われる。(複合語中の)接尾辞 m は古形である)

<sup>118</sup>P. sruvam B.,K.: srucaṃ

<sup>119</sup>ākāśaṃ ghnān sruvaḥ (B.,K.: srucaḥ) pātai roṣād aśrūny avartayat pātair という具格複数形が、何を指すのかはっきりしない。pāte と読む写本もある (D4,G1)。

<sup>120</sup>B. はこの詩節の前に、yudhiṣṭhira uvāca を挿入している。

<sup>121</sup>B.,K. はこの詩節の前に、bhīṣma uvāca を挿入している。また、K. は bhīṣma uvāca の後に次の 12 行を挿入している。(=MBh.XII.806\*)

hutas(806\* hutam) tvayāvādāniha+ puroḍāśasya yāvati /  
 (+ avadāni, Cf.Critical Notes, v.16, p.2224(right), P. vol.16, p.2224(right))  
 (ここであなたによって切られた供物の祭餅のある量が(?)、)  
 grhītā devadevena matpratyaḥṣaṃ na saṃśyam / (Cf.P.XII.323.14cd)  
 (神々の神によって私の眼前で取られた。このことは疑いがない。)  
 ity evam ukte vasunā sarośāś cābravīd guruḥ /  
 (とこのようにヴァス王に言われて、師(プリハスパティ)は怒りをもって言った。)  
 na yajeyam ahaṃ cātra paribhūtas tvayā nṛpa /  
 (「私はここで汝に支配されて、祀るべきではないであらう、王よ。)  
 tvayā paśur vāritaś ca kṛtaḥ piṣṭamayaḥ paśuḥ /  
 (家畜(の殺害)は汝によって禁じられ、小麦粉でできた家畜が作られた。)  
 tvam devaṃ paśyase nityaṃ na paśyeyam ahaṃ katham /20/  
 (汝は常に神を見るのに、私はどうして見るができないのか。)  
 vasur uvāca /  
 paśuhimsā vāritā ca yujurvedādīmantrataḥ /  
 (家畜の殺害は、ヤジュルヴェーダなどの真言によって禁じられているのです。)  
 ahaṃ na vāraye hiṃsā draḥsyāmy ekāntiko harim /  
 (私は殺害を禁じてはいません。私は、専心するからこそハリを見るのです。)  
 tasmāt kopo na kartavyo bhavatā guruṇā mayi /21/  
 (それ故、師であるあなたは私を怒るべきではありません。)  
 vasum evaṃ bruvāṇaṃ tu kruddha eva bṛhaspatiḥ /  
 (このように言うヴァス王に、怒ったプリハスパティは、)

- (17) 彼らは静かに「あなたは、怒るべきではありません<sup>122</sup>。あなたが怒ったことは、クリタ・ユガ期のダルマにかなっていません」と、彼(プリハスパティ)に言った。
- (18) なぜならば、この捧げられた(供物の)取り分を取る神は怒りをもつ方ではないからです。プリハスパティよ、彼はあなたによっても、我々によっても見ることはできません。彼が恩寵を与える者だけが彼を見ることができるのです<sup>123</sup>。
- エーカタ、ドヴィタ、トリタは言った<sup>124</sup>。
- (19) 私たちは、ブラフマンの心から生まれた(mānasa)息子たちとされています。ある時、幸福を求めて、北方に行きました。
- (20) 四千年間、最高の苦行を行って、一本足で立ち<sup>125</sup>、まさしく木の棒となって、心を集中しました。
- (21) メール山の北方、乳海の岸に、私たちが最も厳しい苦行を行った場所があります<sup>126</sup>。どうすれば、我々はナーラーヤナ神の姿を見ることができるだろうか、と(考えました)。
- (22) すると、誓約(の後)の沐浴において、姿なき声が言いました<sup>127</sup>。「バラモンたちよ、汝らは、清浄な心によって(prasannenāntarātmanā)、よく苦行を行った。
- (23) 汝らは、信仰篤く、どうすればかの神を見ることができるか、知らんとしている。乳海の北に、大きな輝きをもつ白い島がある<sup>128</sup>。
- (24) そこで、月の輝きをもつ人々が(mānavāḥ)、ナーラーヤナに専心している。彼らは、専一の心に入り、最高のプルシャを信愛している<sup>129</sup>。

uvāca ṛtvijaś caiva kiṃ naḥ karmeti vārayan /22/

(「ホートリ祭官(である私)にとって我々の祭式は一体何か」と(祭式を)妨げつつ、言った。)(Sandhi irregular: *uvāca ṛtvijaś* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *prastiṣṭa-sandhi*. 1.1.2.3. -a/ā ṛ-, p.10.15 .)

athaiketo dvitāś caiva tritāś caiva maharṣayaḥ /

(するとエーカタ、ドヴィタ、トリタという大仙たちは(言った)。)

<sup>122</sup>K. はこの後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.807\*)

śṛṇu tvaṃ vacanaṃ putra asmābhiḥ samudāhṛtam /

(息子よ、汝は我々が言った言葉を聞くがよい。)

<sup>123</sup>yasya prasādam kurute sa vai tam draṣṭum arhati Cf.Hopkins[Great Epic]: the grace of God is here the chief element of salvation, "That man can see Him, to whom He gives His grace", p.188.12; Parallel Phrases in the two Epics, p.430, No.223.

<sup>124</sup>P. ekatadvitritāś ūcus / B. ekatadvitritāś cocus tataś citraśikhaṇḍinaḥ / (=MBh.XII.808\*) K. omitted

Cf.Hopkins[Great Epic]: Ekata-Dvita-Tritāś co 'cus, hypermetric light dissyllable, a mora measurement of two breves, or light syllables, as a substitute for one and long vowel or heavy syllable, p.257.5.

K. は、P. の第 16 詩節の後に挿入された 12 行(=MBh.XII.806\*)の最終行が類似しているが(athaikato dvitāś ca tritāś caiva maharṣayaḥ /), P.,B. に対応する箇所はない。

<sup>125</sup>P. ekapādasthitāḥ B. ekapādāḥ sthitāḥ K. ekapādā sthitāḥ

<sup>126</sup>この後に、B. は次の 2 行を挿入している。K. はこのうちの 2 行目のみを挿入している。(=MBh.XII.809\*)

kathaṃ paśyemahi yaṃ devaṃ nārāyaṇātmakam /

(我々はどうすれば、ナーラーヤナを本質とし、)

vareṇyaṃ varadaṃ taṃ vai devadevaṃ sanātanam /

(願わしい恩寵を与える、神々の神である、永遠の神を見ることができるであろうか。)

<sup>127</sup>B.,K. はこの後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.810\*)

snigdhaḡambhīrayā vācā praharṣakarī vibho /

(愛情深い音声によって、(私たちを) 歓喜させるものでありました、力ある者よ。)

<sup>128</sup>śvetadvīpo Cf.Hopkins[Great Epic]: the White Island, or rather country (dvīpa = dig uttarā or more exactly uttarapaḡcimena, "in the Northwest"), p.116.7.

<sup>129</sup>ekāntabhāvopagatās te bhaktāḥ puruṣottamam Cf.Hopkins[Great Epic]: ekāntabhāvopagatāḥ, Parallel Phrases in the two Epics, p.405, no.27; Matsubara[1994]: alliterative word play, *mānavāḥ ... / ... bhaktāḥ puruṣottamam*, p.79.9.

## 叙事詩の宗教哲学

- (25) 感官を超え<sup>130</sup>、食事をとらず、動作のない (niṣpandāḥ)、よい香りを発する彼らは、千の光線をもつ永遠の神に入る。
- (26) この白い島に住む人々は、唯一神に専心している人々である (ekāntinaḥ)。汝ら聖者たちはそこへ行くがよい。そこで私のアートマンが顕示されるであろう。」
- (27) そこで私たちは皆、この姿の見えない言葉を聞いて、示された通りの道を通って、その場所に入った<sup>131</sup>。
- (28) 神を心に思い (taccittāḥ)、神を見たいと願う私たちが、白い大きな島に着くと<sup>132</sup>、その時私たちの視界は遮られました。
- (29) 私たちは、神の光によって視力を奪われ、プルシャを見ることができませんでした。すると私たちには、神への集中によって生じた (devayogajam)(次のような) 考えが浮かびました。
- (30) 「実に苦行を実行していない者によっては、正しく見ることはできないのだ。」そこで、再び百年の間継続して大苦行を行って、
- (31) 私たちは、誓約の終りに、月のように白い、あらゆる相をそなえた吉祥な人々を見ることができました<sup>133</sup>。
- (32) バラモンよ、常に合掌し、東方と北方を向いて低誦する人々を (見ることができました)。マーナサ (精神的) という名の低誦が彼ら偉大な人々によって唱されていた。その一心さにハリ神は喜ぶのです。
- (33) ユガ期の終末に生じるであろう太陽の光のごとき光が、虎のごとき聖者よ、一人一人の人間に生じていました。
- (34) その島は、光の住居である、と私たちは思いました<sup>134</sup>。そこでは誰かがより優れているということではなく、すべての人たちが等しい光をもっていました。
- (35) その時、千の太陽が同時に生じた (ごとき) 光を、突然再び、我々は見たのです、プリハスパティよ<sup>135</sup>。

<sup>130</sup>P. atīndriyā B.,K.: anīndriyā Cf.MBh.XII.322.13ab

<sup>131</sup>P., B.: pratīpedire K. praviśemahi N. puruṣavyatyaya āṛṣaḥ / (一人称複数に対して三人称複数形の動詞用いられるという動詞活用語尾の) 人称の変更は古形である) Cf.MBh.XII.323.31 Ca. 注。

<sup>132</sup>K. は ab 句の後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.811\*)

sahasā hi gatāḥ sarve tejasā tasya mohitāḥ / (突然、全員が神の光によって惑わされました。)

<sup>133</sup>P.,B. dadṛṣire K. dadṛṣimo Ca. dadṛṣire, puruṣavyatyayaḥ chāndasaḥ / menire (34b) ity api tathā / (dadṛṣire というように、(一人称複数に三人称複数形の動詞が用いられるという) 人称の変更は古形である。第 34 詩節 b 句の menire も同様である) Cf.MBh.XII.323.27 (vayam — pratīpedire).

<sup>134</sup>iti vai menire vayam Cf.MBh.XII.323.31, Ca's comment on dadṛṣire. Cf.Hopkins[Great Epic]: careless enough, for example, to construe *iti vai menire vayam*, p.140.26; a syntactical monstrosity, p.265.14.

<sup>135</sup>bṛhaspate Ca. brahmaṇām, bṛhatām mahatām ca patim, vāsudevam / bṛhaspatir eva saṃbodhyaḥ, tena bṛhaspate iti vā paṭhaḥ / ((bṛhaspatim とは (?) brahmaṇām バラモンたちの、すなわち、広大な者たち、偉大な者たちの、patim, すなわち、ヴァースデーヴァを、という意味である。あるいは、プリハスパティは呼びかけの対象である。従って、bṛhaspate プリハスパティよ、という読みもある)

- (36) すると、人々は皆、合掌し歡喜して急いで走り、「歸依申します」と言いました。
- (37) それから私たちは、彼らの賞賛する大きな声を聞きました。実に、この人々は、この神に贈物を捧げたのです。
- (38) 私たちはしかし、突然神の光によって意識を失い、視覚・力・感官を奪われて<sup>136</sup>、何も見る事ができませんでした。
- (39) しかしよく通る<sup>137</sup>一つの言葉が発せられたのを私たちは聞きました<sup>138</sup>。「御身は勝利しました、蓮の花の目を持つ方よ、御身に敬礼します、すべてを生み出す方よ。
- (40) 御身に敬礼します、逆立つ髪をもつ方よ、最初に生まれた偉大なプルシャよ。」と、このように音声学の規則にかなって発せられた声を私たちは聞いたのです。
- (41) その間に、あらゆる香りを運ぶ清浄な風が、もろもろの天の花や祭式に用いるもろもろの薬草を運びました。
- (42) 「五時」を知り<sup>139</sup>、一意専心するこれらの人々によって祭られたハりは<sup>140</sup>、彼らによって発せられた言葉に従って、確かにその場にやってきたのです。しかし、私たちは、彼の神の幻力によって惑わされ<sup>141</sup>、見ることはできませんでした。
- (43) 風が止み、供物が捧げられてしまうと、私たちの思いは混乱しました、アンギラスたちの中で優れた方よ。
- (44) 清浄な母胎をもつ千人の人たちの中で、心によっても、眼によっても、私たちが敬う者は誰もいませんでした。
- (45) 自己に立脚して (svasthāḥ)、一心に誓約を行う聖者の群も、ブラフマンへの没頭に従事して<sup>142</sup>、私たちに心は向けませんでした。
- (46) 疲れ果て、苦行によっても瘦せた私たちに、その時、身体をもつことなく自己に安住する何らかの存在が (svasthaṃ kim api bhūtam)(次のように) 言いました<sup>143</sup>。

<sup>136</sup>P. hṛtadr̥ṣṭibalendriyāḥ B.,K.: hatacakṣurbalendriyāḥ

<sup>137</sup>P. 'virataḥ B.,K.: vitataḥ

<sup>138</sup>P.39ab 句の後に、K. は次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.812\*)

ākāśaṃ pūrayan sarvaṃ śikṣākṣrasamanvitaḥ / (虚空全体を満たす、音声学の規則にかなった、)

<sup>139</sup>pañcakālañair Ca. pañcakālañaiḥ, pañcarātrañaiḥ / tatrāpi rātripadena dīkṣākāla- nityapūjākāla- naimittikapūjākāla- kāmyapūjākāla- pratiṣṭhākālāḥ lakṣyante / (pañcakālañaiḥとは、パンチャラートラ(五夜)を知る者たちによって、という意味である。そこでもまた、rātri 夜の語によって、淨身の時、通常の礼拝の時、臨時の礼拝の時、任意の礼拝の時、儀礼の時が意味されている)

<sup>140</sup>B.,K. は P.ab 句の後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.813\*)

bhaktiā paramayā yuktair manovākkarmabhis tadā /

(その時、最高の信愛を伴った心・言葉・行為によって(祭られ)、)

<sup>141</sup>mohitā tasya māyā Cf. Hopkins[Great Epic]: Here māyā is truly illusion, "deluded by the God's māyā", p.140.18.

<sup>142</sup>brahmabhāvam anuṣṭhitaḥ Ganguli: all practising the Brahma-frame of mind, p.125.13. Ganguli はこの意味を次のように解説している。"as all of them were practising that frame of mind which resembles Brahma, they did not regard us, i.e., neither honoured nor dishonoured us". (p.125, fn.3)

<sup>143</sup>B.,K. ともこの詩節の後に deva uvāca を挿入している。



叙事詩の宗教哲学

- (47) 「汝らは、すべての感官をなくした白い人々を見た。(汝らが)見たこの者たちが、神々の主を見たのである、最高のバラモンたちよ<sup>144</sup>。
- (48) 聖者たちは皆、すぐにここから来た通りに帰るべし。神は、信愛なき者によって見られることは決してないのであるから<sup>145</sup>。
- (49) 実に、長時間一心に集中した者によって<sup>146</sup>、光の円盤の中に見るのが難しいかの至尊者は見られるのである。
- (50) しかし、最高のバラモンたちよ、今からクリタ・ユガ期が去って、転倒に至ったとしても<sup>147</sup>、汝らによって為されねばならない重要なことがある。
- (51) バラモンたちよ、(マヌ・) ヴァイヴァスタの時代において、トレーター・ユガ期が到来しても、汝らは<sup>148</sup>、神々の為すべきことの完成のために、(神々の) 助力者たちとなれ。」
- (52) この不可思議な言葉を聞くと、ソーマ酒を飲む者よ<sup>149</sup>、かの神の恩寵によって、私たちはすぐに望みの場所に着きました。
- (53) このように卓越した苦行によっても、神と祖先へのもろもろの供物によっても、私たち神を見る事ができませんでした。どうしてあなた(ブリハस्पティ)が彼を見ることができましょう。ナーラーヤナ神は、偉大な存在です。一切の創造者であり、神と祖先への供物を享受する者です<sup>150</sup>。

ビーシュマは言った。

- (54) このようにエーカタの言葉によって、ドヴィタとトリタの好意によって、そしてサダスヤ祭官たちによって、心静まった賢明なブリハस्पティは、祭式を実行し、神を礼拝した。
- (55) ヴァス王もまた祭式を完了し、人々を保護した。しかし、その後、バラモンの呪いによって、天から落ちて地中に入った<sup>151</sup>。
- (56) (ヴァス王は) 地中に入っても、常にダルマに専念し、ナーラーヤナに専念して、ナーラーヤナの言葉を詠った<sup>152</sup>。

<sup>144</sup>P. ebhir dr̥ṣṭair dvijottamāḥ B.,K.: ebhir dr̥ṣṭair dvijottamāḥ Cs. bhagavati dr̥ṣṭe yat phalaṃ tad bhāgavateṣu dr̥ṣṭeṣv api bhavati / (bhagavat 至尊者が見られることにおける果報は、見られた bhāgavateṣu バーガヴァタ派の人々においても存在する)(?)

<sup>145</sup>P. na sa śakyo abhaktena B.,K.: na sa śakyas tv abhaktena (*tu*, hiatus breaker) Sandhi irregular: śakyo abhaktena Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.2. -o a-, p.21.7.

<sup>146</sup>P. ekāntitvaṃ samāgataiḥ B.,K.: ekāntitvaṃ upāgataiḥ

<sup>147</sup>viparyāsaṃ gate 'pi ca Cs. viparyāsaṃ gate, viparītasvabhāve, rākṣasādibhir adharmabahulam iti yāvat / (viparyāsaṃ gate とは、転倒がその本性である時、すなわち、羅刹などによってアダルマが盛んになっても、という意味である)

<sup>148</sup>P. vaivaste 'ntare prāpte viprāḥ tretāyuge tataḥ B.,K.: vaivaste 'ntare viprāḥ prāpte tretāyuge punaḥ Cf.Hopkins[1903]: the Manvantaras are known to the pseudo-epic, "when the Tretā Yuga shall have replaced Kṛta in the (Manv)antare of Vivasvat", p.46.26.

<sup>149</sup>P. niśamyaiṣaṃ sma somapa B.,K.: niśamyaiṣāṃṛtopamam

<sup>150</sup>B.,K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.814\*)

anādinidhano 'vyakto devadānavapūjitaḥ /

((ナーラーヤナ神は) 無始無終、顕現することなく、神々や悪魔たちによって礼拝されています。)

<sup>151</sup>B.,K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.815\*)

sa rājā rājasārdūla satyadharmaparāyaṇaḥ /

(彼の王は、諸王の中の虎よ、真実のダルマに専念した。)

Cf.Hopkins[Great Epic]: satyadharmaparāyaṇaḥ, Parallel Phrases in the two Epics, p.439, No.293.

<sup>152</sup>P. nārāyaṇapadam jagau B.,K.: nārāyaṇajapaṃ japan

茂木

- (57) その神の恩寵によって再び彼は上昇した。彼は、すぐに地表よりブラフマンの領域に入った。(すなわち) すぐに最高の最終的な地点に達したということである。

(2018年 1月11日 受付)  
(2018年 3月26日 受理)